



インドの交通事情

1. はじめに

インドは、日本と同様に左側通行を採用しており、車の多くは右ハンドル車です。そのため、右側通行を採用する米国等で左ハンドル車に乗ることに比べれば、インドで右ハンドル車に乗る方が日本人にとって馴染み易いはずですが。にもかかわらず、インドで初めて車に乗った日本人の多くが衝撃を受けることになるのです。本稿では、その原因を探ってみたいと思います。

2. 交通事情

(1) ラン・オン・ザ・ライン

「道路上の、自動車が走行するように定められた部分。自動車が並行して通行できる台数によって道路の幅を表すこともある。」これは、三省堂『大辞林』による「車線」の定義です。読者の皆さんは、道路上に引かれた2本の白線で区切られた領域を車線として認識していると思います。こんなことは、本来辞書に頼るまでもない「当たり前過ぎる常識」でしょう。しかし、日本人にとっての「当たり前過ぎる常識」は、インドでは全く通用しません。

まず、写真1をご覧ください。この写真は車線変更の瞬間を撮影したものではありません。インドでは、当然のように、道路上に引かれた白線上を車が走行します。かろうじて「車線」を走行している車も端に寄っています。インド人は、道路上に引かれた白線そのものも車線として認識しているのです。

「インドの常識」に照らし合わせると、「片側2車線」の道路は、日本人にとっての2つの車線とインド人にとっての車線（2車線の

間の白線）を合わせて、「片側3車線」の道路に変貌します。

インドの自動車メーカ「タタ自動車」が衝撃的な価格で売り出した小型車「ナノ」をご存知の方も多いでしょう。「ナノ」であれば、「片側2車線」の道路に、6台が併走することもできそうです。「ナノ」はただ安いだけの車ではなく、インドの交通常識が生んだ製品ともいえるでしょう。



〈写真1：ニューデリー近郊の日常〉

(2) 逆走レーン

日本で車が平然と逆走していたら、すぐに警察に捕まるでしょう。しかし、インドでは一番端の車線を逆送する車をよく見かけます。初めて見かけたときは危険を感じたものですが、1週間もインドに滞在すると、これが珍しい光景ではないことに気づきます。インド人は、逆走する車がいることを前提に運転しているらしく、一番端の車線を走行する際には特に注意しているようです。

インドでは、日本に比べて、信号機間の間隔が長く、中央分離帯が設けられていることも少なくありません。そのため、目的地と逆

方向に走行しているときにUターンできる交差点を探しては、時間のロスが大きくなってしまいます。こういった事情から、逆送する車が後を絶たないようです。

(3) 歩行者の横断

信号機が少ないことは歩行者にとっても大きな問題です。道路を横断する場合、待てど暮らせど車が途切れません。上記のとおり、信号機間の間隔が長いと、信号機がないエリアでは近くの横断歩道を見つけることは至難の業です。しかし、インド人は、日本人には到底理解できない「独特のタイミング」で、横断歩道のない場所で横断し始めます。最も安全な横断方法は、近くで横断しようとしているインド人を見つけ、そのインド人のすぐ後ろについて横断することです。間違っても、インド人の「独特のタイミング」を独学で身につけようとしてはいけません。

(4) イン・サイド・ミラー

インドの都市部では交通渋滞が深刻で、ドライバーは、少しでも前に進もうとする傾向があります。しかし、上記のとおり、インド人にとっての「車線」は日本人のそれとは異なるため、少しでも隙間を見つければ割り込んできます。これが、インドで小型車が人気を博している理由の1つといえるでしょう。狭い隙間に割り込むためには、車体の外側にはみ出ているサイドミラーですら邪魔物です。例えば、インドの三輪タクシー「オートリクシャー」。写真に示すように、サイドミラーが内側に取り付けられています。内側に取り付けられた「イン・サイド・ミラー」が後方を映し出す役割を十分に果たしているかどうかは定かではありません。そもそもドライバーに後方確認の意思があるのかも甚だ疑問です。しかし、良くいえば、インドの交通環境の中で生き抜くための「先人の知恵」なのでしょう。



(写真2：インサイドミラーを備えたオートリクシャー)

3. むすび

インド人の運転スキルは決して低いわけではありません。インドにも道路交通法があると思いますが、法律を守っていても、かえって事故に遭ってしまうのかもしれない。日本人がインドで車を運転することは容易ではありません。インドでは、インド人ドライバーをつけることをお勧めします。

筆者紹介

高橋明雄（たかはし・あきお）

グローバル・アイビー東京特許業務法人 代表弁理士
1979年埼玉県生まれ。2005年東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修了。専門は物理、電気及び機械。2005年弁理士試験合格。2010年米国パテントエージェント試験合格。企業(知財部)4年、特許事務所5年(日本3年、米国2年)。2013年1月より現職。趣味はゴルフ。複数回にわたるインドへの渡航経験がある。

編集者紹介

木本大介（きもと・だいすけ）

グローバル・アイビー東京特許業務法人 弁理士
1977年神奈川県生まれ。2003年上智大学大学院理工学研究科電気電子工学修了。専門は通信、エレクトロニクス及びコンピュータソフトウェア。2005年弁理士試験合格。企業(知財部)3年、特許事務所7年の経験を経て、2013年7月より現職。趣味はゴルフ。